HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学英語教員が認識する授業不安に関する実証的研究 ： 影響要因と対処過程を視野に入れた混合研究法による分析［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	片岡, 恋惟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16318号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95245
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	KATAOKA_Rei_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：片岡　恋惟

審査委員　主査　特任教授　河合　靖
副査　特任教授　小林　由子
副査　講　　師　オン　イーシュエン

学位論文題名

大学英語教員が認識する授業不安に関する実証的研究

－ 影響要因と対処過程を視野に入れた混合研究法による分析 －

本研究は，大学英語教員を対象に，授業不安の内容や構造とその影響要因および対処方法を，質問紙調査と半構造化面接を用いる混合研究法により実証的に考察した応用言語学研究である。英語教育分野における不安研究では，学習者を対象とした外国語学習不安の研究が主流で教員を対象とした研究は限定的あり，また，教員を対象とした不安研究以外も含めた研究では小・中・高の教員を対象としたものが多く大学教員の研究は進んでいない。しかし，日本の大学では教員になるための教職課程の履修や何らかの資格の取得は必要ではなく，また，外国語授業を担当する教員の専門は英語教育学や応用言語学に限らず多岐に渡る上に，英語圏ではない日本で英語を学んだ日本人であれば教師であっても「外国語不安」を持つ者がいることが想定される。さらに，小・中・高に比較して任期付きの採用や非常勤の雇用の割合も高く，大学で教えることによる特殊性も存在する。著者は，(1) 大学英語教員の授業不安と対処方法，(2) 授業不安に影響を与える要因および両者の関係，(3) 授業不安への対処過程を明らかにすることを目的として，本研究を実施した。

量的研究としてWEBでの質問紙調査を実施し，尺度の開発と因子分析，相関分析，重回帰分析などを行った研究1～3では，授業不安は「授業方法に関する不安」，「学生・教育環境に関する不安」，「英語教員としての資質に関する不安」の3側面を持ち，不安の認知は単一の影響要因ばかりではなく複数のそれに対して多次元的に行われる示唆を得たと著者は主張する。一方質的研究として複線径路・等至性アプローチによる半構造化面接の分析を行った研究4では，授業不安への対処に成功しなかった場合でも，影響要因が授業不安の慢性化を防ぐ効果を持つことがあり，授業不安が必ずしも慢性化しないことが示唆されたとしている。

口頭試問は 2025 年 1 月 9 日 13 時から約 1 時間 30 分にわたって行われた。まず，博士論文提出者が約 30 分間論文の内容について発表を行った。次に，審査委員との間で研究の意義や新規性，研究方法，研究の限界と今後の研究への示唆などの観点から約 30 分間の質疑応答が行われ，残った時間でフロアからの質問も行われた。その後，約 30 分間審査委員のみで本論文の審査を行った。

質疑応答では，授業不安の帰属性からみた分類と多様性，授業不安の定義と研究実施による解釈変化の可能性，研究対象者の特徴，とくにその人たちの持つ授業不安の内容，大学教員の特殊性と彼らを対象とすることの意義，質的分析の対象者の属性と選定の妥当性，研究対象者の国籍や母語の違い，背景理論としての認知的評価理論との適合度や今後の研究の発展性，対象者の規模に関わる限界，英語運用能力の高い日本人英語教員の調査結果の有無，対処過程の調査における今後の展開，複線径路・等至性アプローチを用いたことによる利点と限界，尺度項目の用語選定などの点について質疑応答が行われた。著者は，それぞれの質問に対して真摯かつ誠実な態度で，簡潔かつ適切に回答していた。発表および質疑応答を通して，著者の研究が一般的に正統と認められた伝統的な手法と比較的新奇な手法を調和させながら，手堅く実施されてきたことが感じられ，博士論文の研究として十分な水準であることが推察された。

質疑応答の後，著者本人及び参加者が退出し，審査委員のみによる審査を実施した。審査委員は，次の 3 点で本論文を高く評価し，その意義を認めると判断した。まず，第一に，本研究のもっとも大きな部分を占める質問紙法による量的分析で，尺度を開発して今後の研究に対する貢献をしたこと，ならびに日本の大学教員を対象としてこれまでにない知見を得たことは，研究上の意義として高い評価に値すると判断する。第二に，さらにインタビューによる質的分析を加えて混合研究法とし，そのなかでまだ新しい複線径路・等至性アプローチを取り入れてこれまでにない知見を加えたことは，今後の同分野の研究の発展に寄与する。第三に，これまでの応用言語学における不安研究では，不安の内容の分類やそれに対する影響要因の特定に主な主眼が置かれてきたが，対処方法に着目して研究を発展させている点が新規性として評価に値する。

一方，審査員からは，不安の定義に精緻さが欠ける点，研究のなかで明らかになった不安の特徴に関する言語化がさらに期待される点，量的研究と質的研究のつながりが不足している点，大学教員の特殊性が強調不足な点などが問題点として指摘された。以上の問題は残されているものの，応用言語学研究の当該分野に今後影響を与え得る研究であると審査員は判断し，本論文を学術的にも社会的にも優れた貢献であると評価する。よって，審査委員会では本論文を，博士（学術）の学位を授与される資格があるものと判断した。